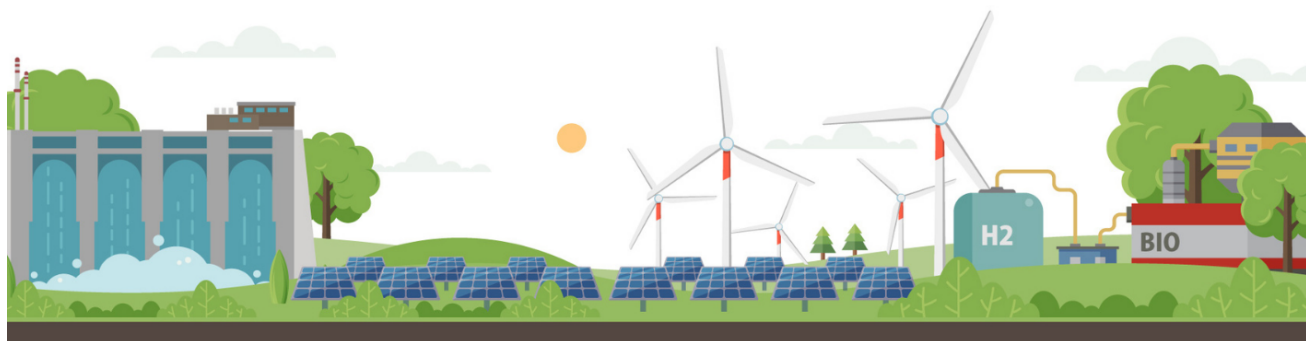


THE INTERVIEW

大学等コアリション地域ゼロカーボンワーキンググループ（WG）

インタビューシリーズ



大学の「知」の集積・発信に
リサーチ・アドミニストレーター（URA）
が果たす役割

熊本大学

日時：2024年11月11日（月）

場所：オンライン

インタビューー：

熊本大学 理事・副学長
（研究・グローバル戦略担当、産学連携担当） 大谷 順 先生

研究・社会連携部 研究推進課 課長 渡辺 寿生 様

同課 URA推進室 准主幹URA 本田 一貴 様

URA 上田 盟子 様、URA 清水 あかね 様

取材：地域ゼロカーボンWG事務局（IGES：石川、矢野）

2024年2月、地域ゼロカーボンWGとゼロカーボン・キャンパスWGは共同で、キャンパス及び地域の脱炭素化において先進的な取組を進めている広島大学の視察を開催し、計29大学が参加しました。その際、各大学における同様の取組も紹介いただき、熊本大学からは「今後カーボンニュートラルに携わる学内の研究者の見える化を行う予定」との紹介がありました。その後、その進捗を確認したところ、[カーボンニュートラル研究に関する Web サイト](#)を開設されたとのこと。Web サイトを見ると、カーボンニュートラルに携わる先生方の研究・活動が見やすく整理されており、他大学の参考になるのではないかとわれ、インタビューをお願いしました。（是非 Web サイトをご覧ください！）

同 Web サイトはリサーチ・アドミニストレーター（URA）が主導した成果ということで、今回はこれまであまりインタビューシリーズでは取り上げてこなかった URA に焦点をあてました。熊本大学の URA 体制は文部科学省の研究大学強化促進事業の採択を目指し、2011年に2名でスタートし、現在は17名で運営されています。同事業は2013年度に開始され2022年度に終了していますが、その後も自主財源で継続されています。現在は研究系、産学系、国際系、IR系の4分野に人材を配置し、大学の研究力強化に努めています。研究と研究支援の両輪が上手く機能している取組の一例として、熊本大学 URA の組織構造、キャリアパス、業務内容、人材育成、そして今後の展望についてお話を伺いました。

熊本大学における URA 組織化の経緯

- 本日はインタビューをお受けいただきありがとうございます。まずは熊本大学の概要と目指す方向性などについて教えてください。



写真1 熊本大学 大谷理事

大谷理事（以下敬称略）：熊本大学は8学部6大学院を持ち、学生数は大学院生も含めて約1万1000人、教職員数2,746人です（図1）。第4期中期目標期間（2022年度～2027年度）の開始に合わせ、小川学長のリーダーシップの下、2030年までを見据えた中長期的なビジョンとして、「[熊本大学イニシアティブ2030](#)」を策定しました（図2）。

本イニシアティブは、本学が目指す「地域と世界に開かれ、共創を通じて社会に貢献する教育研究拠点大学」の実現に向けて、「教育」「研究」「社会との共創・医療」の3つの戦略に基づく取組をまとめたものです。また「九州の中核的総合大学として、国・地域・分野、様々な枠組みを飛び越えSDGsの達成を目指す」をビジョンとしており、研究面では「カーボンニュートラルへの挑戦」を掲げています。

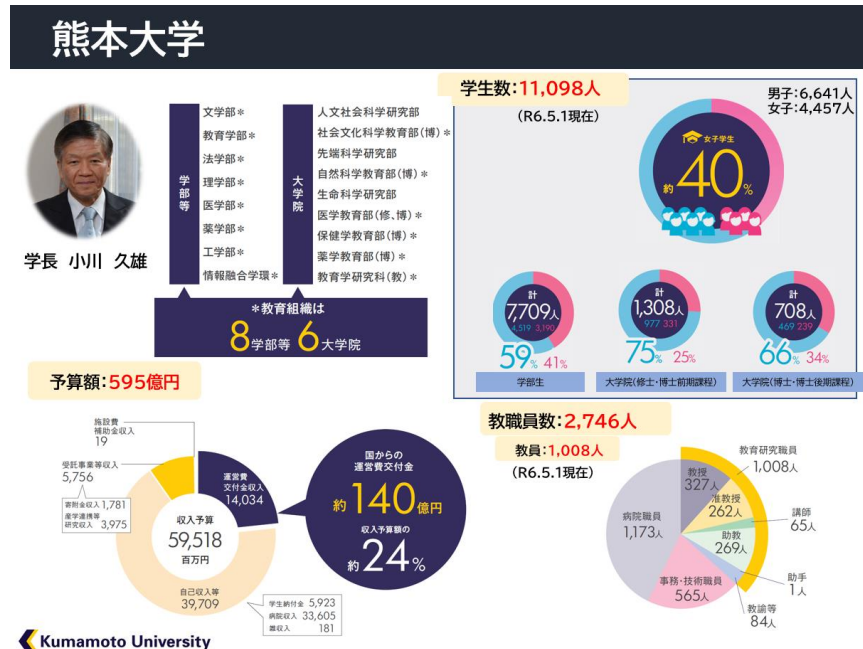


図1 熊本大学概要説明 出所: 当日配布資料



図2 熊本大学イニシアティブ 2030 出所: 当日配布資料

- Web サイトが研究分野ごとにわかりやすく整理されていますね。その構築にあたり、URA が重要な役割を果たされたと同いました。まず熊本大学における URA 組織化の経緯について教えてください。

大谷： 2011 年に文部科学省の[研究大学強化促進事業](#)の採択を目指して URA 人材 2 名を雇用し、2013 年に同事業を受託したことを契機に 13 名に増員し、研究系と産学系に分けて組織しました。2022 年に同事業の補助金が終了したことを受け、URA 全員の自主財源化（自走化）を完了し、現在はミッションに応じて、**研究系**、**産学系**、**国際系**、**IR（インスティテューショナル・リサーチ）系**の 4 分野に配置しています（図 3）。2022 年の時点で URA は 17 名となり、各分野で活躍しています。

URAの確保



2011年	URA事業採択を目指して、URA2名を雇用開始
2013年	研究大学強化促進事業を契機にURA人材を研究系、産学系に配置
2023年	22年に研究大学強化促進事業の補助金が終了し、全員を自主財源化完了
2024年	ミッションに応じて、研究系、産学系、国際系、IR系のそれぞれに配置

図 3 URA の確保 出所：当日配布資料

URA を活用した研究推進体制

- 文部科学省の研究大学強化促進事業の採択を見据えた準備段階から配置がスタートしたんですね。その後自走化されたということですが、現在の体制はどうなっていますか？

大谷：体制としては、[大学院先導機構](#)の下に [URA 推進室](#)が配置されており、学長直下の組織になります。URA 推進室には研究系 URA が所属しており、シニア URA 1 名、URA 5 名の合計 6 名で運営しています。また、大学院先導機構と協力関係にある国際部国際戦略課には国際系 URA が 1 名、[熊本創生推進機構](#)（機構長：大谷理事）には産学系 URA が 10 名、さらに、大学情報分析室（IR 室）に IR 系 URA が 1 名所属しています（図 4）。

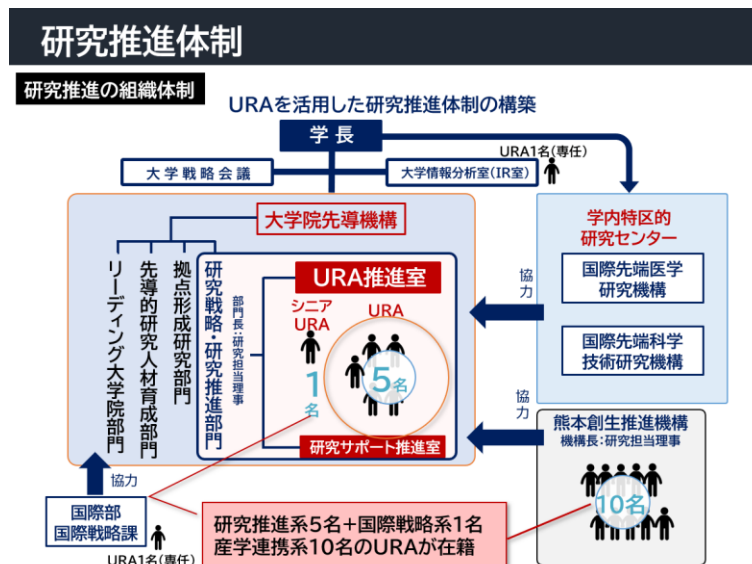


図 4 研究推進体制 出所：当日配布資料

URA推進室の業務体系(令和6年度)

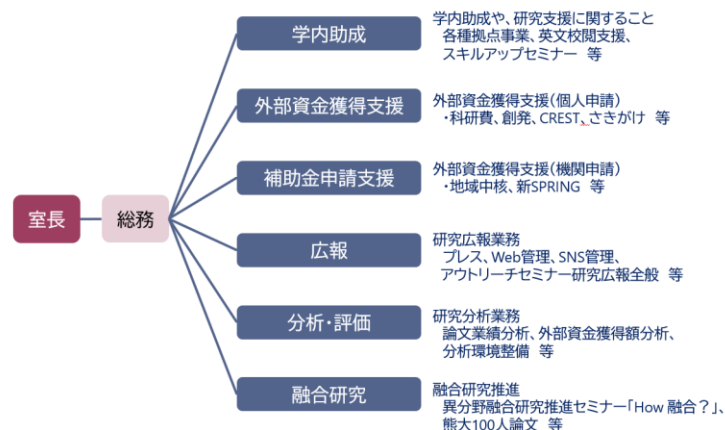


図 5 URA 推進室の業務体系（研究系 URA） 出所：当日配布資料

研究系 URA は、学内助成、外部資金獲得支援、補助金申請支援、広報、現状の研究把握及び分析・評価、融合研究等、非常に多岐にわたります（図 5）。国際系 URA は、主に国際広報及び国際戦略の立案、IR 系 URA は大学情報分析全般を担当しています。また、熊本創生推進機構 イノベーション推進部門に所属する産学系 URA は、主に企業等との共同・受託研究、知的財産の管理・運用及びベンチャー創出支援に携わっています。他の大学では「コーディネーター」と呼ぶところもあると思いますが、本学では URA として組織化しています（図 4）。

熊本大学における URA のキャリアパス

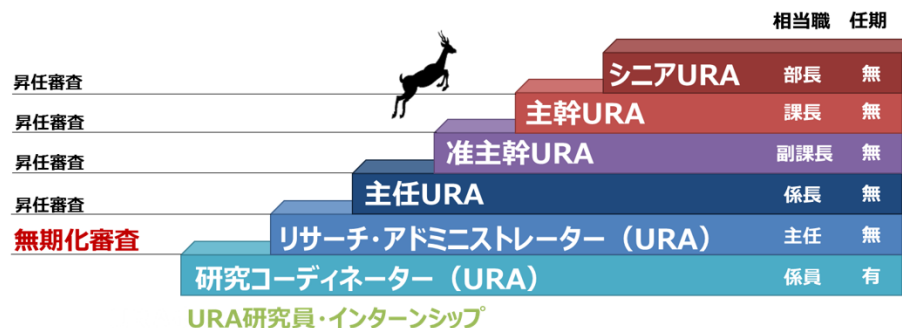
大谷：本学では URA に対するキャリアパスの整備も行っています。まず、研究コーディネーターという短期雇用の形態があり、その活動の結果無期化審査に合格すると、リサーチ・アドミニストレーター→主任 URA→准主幹 URA→主幹 URA→シニア URA とステップアップしていくことができます（図 6）。各段階への昇任審査では、業績一覧の提出、抱負のプレゼン及び面接審査による総合判断を行っています。2017 年からこの無期雇用化の仕組みをスタートし、自主財源を活用して、現在は 17 名のうち 6 名が無期雇用となりました。

URA のキャリアパス

URA キャリアパスの整備

URA の職階（2017 年～）

シニア URA、主幹 URA、准主幹 URA、主任 URA、URA、研究コーディネーター



無期雇用化（2017 年～）

自主財源を活用し、17 名のうち 6 名を無期転換

昇任審査

業績一覧、抱負のプレゼン、面接審査による総合判断

図 6 URA のキャリアパス 出所：当日配布資料

URA 人材の育成に関する取組

- URA の業務内容によって細分化した組織をつくれ、大学の教員と URA がまさに両輪で動いていることがよくわかりました。URA のキャリアパスについては、熊本大学独自で設定されているのでしょうか？

大谷：基本的には本学独自でつくっています。ただ、所々で [RA 協議会](#) が設定しているトレーニング等も上手く活用しながら実施しています。

- URA の人材育成に関しては何かお取り組みをされていますか？

大谷：研究系 URA に関しては、新任者（未経験者）向けには、OJT を中心に幅広い業務を担当させ経験を積ませるようにしています。また、先ほども申し上げたように、RA 協議会の初任者研修等も上手く活用するようにしていますね。今年度からは JST の研修も活用する予定です。

経験者向けには、学内他部署（経営企画本部や産学系部門）への併任や、他機関への出向などを通じて、さらに経験と知見を蓄積させるようにしています。

今後の URA 育成における「あるべき姿」として、URA の高度化を掲げています。「大学戦略・経営戦略」「IR」「広報戦略・知財戦略・外部資金戦略」の 3 つの分野において、総合職を目指すのか、研究専門職を目指すのか、それぞれのキャリア、適正に応じた人材育成をしていきたいと考えています。総合職寄りになるのは「大学戦略・経営戦略」で、主に研究の企画・マネジメント・機能強化を担当、中間には「IR」で研究の情報分析を担当、研究専門職寄りになるのは「広報戦略・知財戦略・外部資金戦略」で、研究支援の実務における専門職 URA（外部資金獲得 URA、広報 URA、部局 URA、知財 URA）になるようなイメージです（図 7）。なお、本学の URA は、比較的若手から中堅の世代が中心で、他機関から雇用するのではなく、基本的には学内で育成するという方針が特徴です。

URAの育成 あるべき姿

URAを高度化

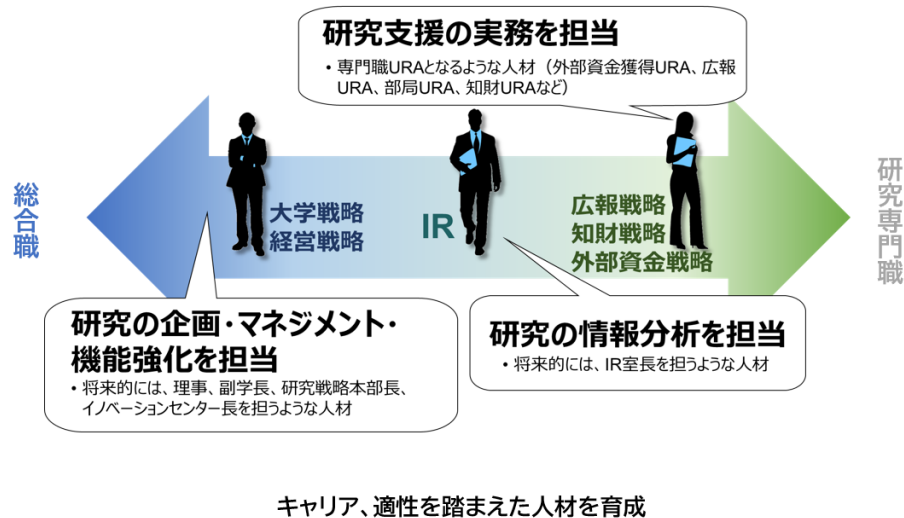


図7 URAの育成 あるべき姿 出所：当日配布資料

- 先ほどお話に出た RA 協議会には熊本大学も主体的に関わっているのでしょうか？

大谷：そうですね、今年の10月に沖縄科学技術大学院大学で開催された [RA 協議会 第10回年次大会](#) に私も参加しましたが、いろいろな大学・機関等でURA業務に関わるすべての方々が一堂に会するので、非常に貴重な情報交換の場になっていると感じました。協議会への参加は基本的に会員制ですが、最近では企業の参加も増えているそうです。企業においてもURAを配置しようとする流れは興味深いですね。また、先ほども申し上げましたが、各大学でやり方が全然違うので、そこが非常に魅力的で、横連携も強い組織なので新しいアイデアも出やすいのではないかと思います。大学はどうしても専門分野で縦割りになってしまいますからね。来年の [第11回年次大会](#) は熊本大学で開催する予定です。

- こうした情報交換の機会を踏まえて、「この大学の研究支援体制はすごい」というような他大学の事例があれば教えてください。

大谷：URAに関しては各大学でそれぞれの組織に合った特色あるやり方をされているので、一意に「こういう組織体がいよい」ということはないと思います。ただ、ある大学では統合URA本部のURAを部局に派遣する制度をつくられており、研究の現場に近い部局のニーズを吸い上げることができることに加え、本部の意向も部局に伝えやすくなるということ

で、今後本学でも参考にして同じような仕組みを検討していきたいと考えています。また、大きな大学では、分野別にして URA を完全に部局だけに置くというやり方をとっているところもあると聞いています。

熊本大学カーボンニュートラル特設 Web サイトについて

- 今年 10 月に開設された[カーボンニュートラル特設 Web サイト](#)の経緯について教えてください。



写真 2 熊本大学 上田 URA

上田：経緯としては、本学のカーボンニュートラル研究／研究者が可視化できていない、研究／研究者情報及び取組が分散している、カーボンニュートラルに関連する学外情報の共有の場がないという課題意識が以前からあり、こうした状況を一気に解決するために、大谷理事主導の下で、Web サイトを構築することになりました。研究者紹介（研究者一覧含む）、イベント、公募情報などのコンテンツから成る Web サイトを作成し、カーボンニュートラルに関連した情報を集約することで、本学カーボンニュートラル研究/研究者を学内外に広くアピー

ルするとともに、新たな研究者間のネットワーク形成、スムーズな研究の開始・進展を後押しすること、ひいては本サイトを通じて、産業界や行政との連携強化を図ることを目的としています。

- 最初に挙げていただいたような課題を認識するきっかけは何かあったのでしょうか？

上田：我々としても熊本大学にどのくらいカーボンニュートラル研究／研究者がいるのかを把握したかったというのが一番だと思います。

- Web サイトの構成は、すんなりとアイデアがきまったのでしょうか？ 工夫された点、難しかった点はどのあたりでしょうか？

上田：今年 1 月に大谷理事及び研究者と本学のカーボンニュートラル研究の可視化という観点からディスカッションを行いました。元々 2023 年 6 月の時点で、経済産業省の[「2050 年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略」における成長が期待される 14 の重要分野](#)を参考に「学内カーボンニュートラル研究者一覧」リストを個人的に作成していたので、そのリストをベースに議論し、我々 URA の方から Web サイト構築の提案をして進めていきました。Web サイトの構成自体は割とすんなり決まりましたね。URA として、学内の研究者を繋いでカーボンニュートラル研究の裾野拡大や、研究の開始・進展をサポート

トしたいという目的で、「HOME」「ABOUT」「研究者紹介」「イベント」「公募情報」「各種リンク・お問い合わせ」というコンテンツ構成にしています。

工夫した点としては、部局（熊本大学大学院先端科学研究部（理学系、工学系）、産業ナノマテリアル研究所、半導体・デジタル研究教育機構、国際先端科学技術研究機構、くまもと水循環・減災研究教育センター、先進マグネシウム国際研究センター）と事務局を横断して情報を集約したことです。学外関連情報については、大学等コアリションや九州地区再生可能エネルギー連携委員会等からの情報を参考に収集して、リンク掲載許可をいただきました。総じてシンプルでわかりやすい見せ方を目指しました。

難しかった点はデザインでしたね。これまで我々は分析や研究支援をメインに実施してきたので、大学の「知」を外部に開いていく Web サイトをいかに構築するかという点で苦労しました。またカーボンニュートラルは多岐に亘るため、全体把握に時間を要しました。

また、Web サイト開設にあたり研究者が十分に集まるかということも心配でしたね。先ほど申し上げた 2023 年 6 月に作成したリストでは、大体 100 名程が該当しそうだと当たりをつけていたのですが、それに対してどの程度の先生方にご賛同いただけるのかと。Web サイトの開設にあたっては、アンケート形式で研究者から情報収集（本調査）を行いました。そのアンケートフォームの作成に際して、事前調査として以前から URA 推進室で行っていた「新任者訪問」の時間を活用し、研究者の意見を聞きました。その中で「自分は全ての分野の基盤になるような領域を研究しているので、アンケートで 14 の重要分野から 3 つの分野を選択するのは難しい」という意見があり、14 の重要分野に加えて本学独自に「全てに関係する基盤分野」と「その他」を追加しました。また、部局長を対象に施行テストを実施し、使用感についても事前に意見をいただきました。これらの意見を反映させて、本調査のアンケートでは選択項目を多くするなど、研究者の負担にならないよう工夫したフォームを作成しました。加えて、大谷理事の強力なガバナンスの下、アンケート調査開始前後に、教授会等での周知活動や、部局長を直接訪問して趣旨説明を行うということもしてきました。こうした努力が実り、現時点の掲載研究者数は 134 名（人文社会科学系研究者 2 名含む）となり、理工系の研究者の実に半分以上が賛同してくださっています。

大谷：私も最初はどのくらいの研究者が参加してくれるか心配でしたが、蓋をあけてみると、皆さん意識が高く、特に部局長は全員掲載しています。そのくらいカーボンニュートラルというのは規模が大きく、連携する分野も多いのだとあらためて認識しました。そういう意味では、この Web サイトを通じて学部や学科を超えた連携もできるようになるのではないかと手ごたえを感じています。

- **ありがとうございます。想像以上にあらゆる機会を活用して丁寧にコミュニケーションされていたり、一つ一つの進め方においても非常に工夫をされていたり、かなり重層的に短期間で進められたことがよくわかりました。同じく熊本大学 URA 推進室の Web サ**

イトを拝見すると、研究系 URA として 5 名が紹介されています。これだけの情報を整理するのに、どのような体制で対応したのでしょうか？ またどのくらいの時間がかかったのでしょうか？



写真 3 熊本大学 清水 URA

清水：理工系の研究系 URA は上田と私の 2 名になりますので、主に 2 名体制で対応しました。研究・社会連携部 研究推進課の渡辺課長と URA 推進室の本田准主幹 URA にはアドバイザーとして入っていただき、福田主任 URA と曾我 URA からは初見での感想をいただき、また動作確認でもサポートしてもらいました。大谷理事とは何度も打ち合わせを実施して、都度具体的な意見をいただきました。部局長の先生方含め、研究者の方々にもいろいろとサポートいただいたので、とても感謝しています。今年の 4 月から企画を開始して、10 月に Web サイト公開と

なりましたので、約半年かかりましたね。

上田：先ほども申し上げましたが、この半年の間には研究者への本調査として 6 月から 3 週間程度かけて実施したアンケート調査も含まれます。9 月にテストサイトが完成してから約 1 週間で最終確認をしていただきました。



写真 4 インタビューにご協力いただいたみなさま

(左から上田 URA、渡辺課長、大谷理事、本田准主幹 URA、清水 URA)

- まだこれからだとは思いますが、Web サイトについて、学内・学外の評判はいかがでしょうか？ また今後どのように地域連携に活用されていきたいとお考えでしょうか？

大谷：現時点ではまだできたばかりなので、評価の最中だと思います。まずは、本学の教職員に知っていただくということで、学内の会議では報告しましたが、さらにこの Web サイトを広く社会に知ってもらうために、本学で毎月一回開催している[学長記者懇談会](#)での発表を予定しています（※[11月13日開催の懇談会で発表済](#)）。今後この Web サイトを通じて、産業界や行政との連携強化を図れればと考えています。

大学等コアリション・地域ゼロカーボン WG について

- 最後に、大学等コアリション・地域ゼロカーボン WG へのご要望があれば教えてください。

大谷：大きく三つありまして、一つ目は、地域ゼロカーボン WG、また大学等コアリション全体にも言えることですが、参加されている方々の層が非常に幅広く、大学の方もいれば、企業の方、またそれ以外の方々もいらっしゃいます。それぞれのニーズも違う中で、すこし話題が広域になりすぎているのではないかと感じており、テーマによって興味を持つ機関、興味のない機関が混在する中での議論の難しさを感じています。

二つ目は、地域ゼロカーボンの「地域」をどうとらえるかということも重要だと思いました。たとえば大学であれば、自分たちの大学のシステムを構築することが、「地域」の一つの観点かと思います。大学は各地域の中で大きな機関なので、地域に与えるインパクトも大きいと思います。特に附属病院をもっている大学は電力を非常に消費するので、大学病院を含めてゼロカーボンを達成していこうとすることは地域ゼロカーボンにとって重要なことだと思います。要は「地域」をどうとらえるかという点で参加者間での意識はかなり異なるのではと思っています。

三つ目は、一般的に地域ゼロカーボンとはどういうことなのかということです。大学は、「研究」「教育」「社会貢献」という3本柱がありますが、地域ゼロカーボンを研究としてとらえるのか、教育または社会貢献としてとらえるのかという点で、いつも悩みます。

以上の3点については、今後の展開に注目しています。他方で本学としては、今回ご紹介した Web サイトを用いて、まずは全教員にカーボンニュートラルへの興味を持ってもらうこと、またその延長として分野を超えた教員間の共同研究が推進されることを期待しています。

加えて、カーボンニュートラルについて一般的にわかりやすいのは、もっと社会的な問題ですね。本学が熊本県、球磨村と共同で進めてきた[電動スクールバス実証事業](#)は社会的なインパクトが大きく、多方面から問い合わせを受けています（※本インタビューの翌日11月12日に同実証事業が「[令和6年度気候変動アクション環境大臣表彰（気候変動アクション大賞）](#)」を受賞され、11月13日開催の定例学長記者懇談会でも報告されました）。電動スクールバスはカーボンニュートラルに資するだけでなく、防災の観点で非常用の電源

としても活用できます。こうした、地域課題に即した研究の実装も非常に大事だと思います。大学での研究のすべてが、すぐに地域課題の解決につながるということでは必ずしもないのですが、今回ご紹介したウェブサイトの参加者数をみてもお分かりのように、本学ではカーボンニュートラルに対する意識が高まっていると感じており、この件は真に地域カーボンニュートラルの一例だと思います。

インタビューを終えて

今回の企画は、冒頭でも記載したとおり、広島大学の現地視察のフォローアップのやり取りが端緒でした。「Web サイトが出来た」との一報を受けて拝見したところ、研究を熟知された構成となっており、当方が考えていたよりも、はるかに上に行く出来栄えに驚きました（すみません…）。なぜこのような構成ができたのだろうという疑問からスタートしました。この Web サイトは、研究を支援するリサーチ・アドミニストレーター（URA）が、その視点をもって構築されたとのこと。については URA について聞かせてもらおうと思い立ったのが、今回のインタビューのきっかけです。（これも冒頭に書きましたが、改めて Web サイト、是非ご覧ください！）

今回インタビューに応じてくださった熊本大学の皆様が、大学の先生方に伴走しつつ、時に研究と研究支援の両輪の欠くべからざる一方として機能していること、何より大変な誇りと情熱をもって業務に当たられていることが良く分かりました。また、URA の活躍を支える仕組みを大学が組織的に整備していることで、URA が仕事に専念できているのだとも感じました。

カーボンニュートラルの研究は非常に多岐に亘ります。今回のインタビューを踏まえて、研究のみならず、こうした研究を支えていく側にも横断的な知見が必要だと認識を新たにする良い機会になりました。このインタビューシリーズは、これまで主として各大学の先生方にて実施されている特徴的な取組を取り上げてきましたが、「黒子」や「縁の下の力持ち」として機能してきた研究の支援、もしくは研究以外の活動にも光をあて、コアリション内の大学・研究機関においてより情報共有が進むとよいのではと思いました。